



専門外科医に聞く

変形性ひざ関節症の治療

手術適応広がる

「人工ひざ関節置換術」

50歳以上の約半数が抱えていると言われる「変形性ひざ関節症」。近年は、保存療法から手術まで、症状に応じた治療法があります。香川県済生会病院の真柴賛副院長に、病気の原因や治療法などについて話を聞きました。



香川県済生会病院 副院長
真柴 賛 先生

ひざ関節が

痛む原因

高齢の方の場合は、変形性ひざ関節症や特発性骨壊死など加齢性の変化が原因で発症する疾患が大半だとされています。中でも変形性ひざ関節症は、国内に約2500万人いると推定され、すべての関節疾患の中でも一番多いと言われます。男性よりも約4倍女性に多く、50歳以上の約半数はこの疾患を抱えていると考えられ、高齢になればなるほど増えていきます。

本来、ひざ関節の軟骨は弾力性に富んでいます。加齢に伴い弾力性を失い、使い過ぎや体重過多などが原因で軟骨がすり減ります。そうすると、軟骨の下の方が表れ、筋肉でしっかり支えられないと、骨同士がぶつかり痛みが出るようになります。

痛みやひざに水がたまるのが主な症状で、初期は立ち上がりや歩き始めなど動作開始時の痛み、進行すると正座や階段昇降が困難になり、安静にしていても痛みを感じます。

変形性ひざ関節症の治療法

ひざの痛みや腫れが2、3週間以上続く場合は、整形外科の受診をお勧めします。整形外科では、患者さんのひざを触り、曲げ伸ばしの状態や痛みが出ている部分を確認します。さらに、レントゲンやMRI検査といった画像検査をしつかり行うことで、痛みの原因を特定し、早期に適切な治療を開始できます。

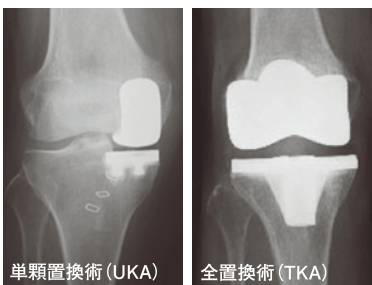
変形性ひざ関節症の場合、一般的には、鎮痛剤や湿布の使用、ヒアルロン酸の関節内注射、足底板やサポーターなどの装具療法といった保存療法から開始します。また、関節が受ける衝撃を和らげるため、大腿四頭筋の筋力訓練を指導します。

しかし、保存療法を続けても症状が改善しない変形が重度な方では、手術が治療の選択肢となります。手術は、O脚に変形した脚をX脚気味に矯正し痛みを軽減させる「骨切り術」と、すり減った関節の表面を削り金属などでできた人工関節に置き換える「人工関節置換術」があります。

進歩している

人工関節置換術

人工関節置換術には、ひざ関節の表面全てを人工物に置き換える「全置換術」(TKA)と、内側または外側だけを置き換える「単顆置換術」(UKA)があります。いずれも、手術方法が確立してきたおかげで、かなり痛みの軽減が期待できます。



単顆置換術 (UKA)

全置換術 (TKA)

全置換術は、ひざ全体の軟骨が損傷し、骨の変形が進行している場合に行われる手術で、日本では年間10万件ほど行われています。手術によって、強いO脚

変形も矯正可能で、曲がって伸びないひざも伸ばすことができます。

一方、単顆置換術は関節のすり減りが片側だけの場合に行う手術です。使用する人工関節は、全置換術用と比べ4〜5分の1程度です。そのため、侵襲が少ない手術が行えるので、早期社会復帰が期待できます。また、術後の違和感も少ないので、患者さん満足度が非常に高い手術です。

人工関節の材質やデザインは進化が著しく、20〜30年程度の耐久性が期待できます。そのために、若い方でも人工関節の手術を希望されることが増えてきました。

出血や感染症など、手術による合併症は、手術時間の短縮や新たな予防措置の導入などにより大幅に発生率を低減できています。また、手術方法の進歩により、90歳を超え手術を受ける方もおられます。

治療機会を逃さないために

人工関節の手術は、以前は最後の手段と言われ、かなり高齢になり受ける手術でした。しかし、高齢になつてから手術を受けようと思うと、どうしてもリスクが高まります。人工関節が長持ちするようにならした現在は、健康でリスクが少ない時期に手術を済ませ、ご自身が活躍できる機会を逃さないで欲しいと思います。ひざの痛みに悩んでいるなら、ご自身に適した治療機会を失わないためにも、一度専門医の受診をお勧めします。

広告に関するお問い合わせ

(株)中日アド企画

☎052(239)1222

〒460-0001 名古屋市中区三の丸一丁目6番1号

※医療行為についてはお問い合わせできません。